

## その世界に浸りたい

養老孟司

大学生の頃、中島敦を読んでいるのは、少しヘソ曲がりだったような気がする。ほかに読む本がたくさんあって、そういう本に比べたらマイナーな感じがしたのだと思う。

いまでは私の考えは違う。現代の基準では天折した作家なので、作品の絶対量がどうしても少ない。だからマイナーに見えるだけであらう。日本語としては、本当に格調の高い文章である。これだけ品のいいものを書く人が、現代にどれだけいるか。そう書く、年寄りの愚痴になるか。

好き嫌いは私の勝手だから、他人に押しつける気はない。それでも個人の好みからすれば、中島敦は好きな作家の一人である。ときどきこういう小説が読みたいと思う。要はその世界に浸りたいという気持ちなのである。

## 推薦の

### 不思議に明るい永遠の光

池澤夏樹

中島敦の文学には時代の刻印がない。彼の世界は不思議に明るい永遠の光に浸されている。それは彼が、結局のところ、人を永遠の相において見ていたからではないか。いかなる時代に置かれたとしても李陵はあのように戦っただろうし、ステイヴンソンはあのように死んだだろう。中島敦は時代が染める表面の色や模様を無視して、人の本然をこそ見ようとした。

彼の書いたものが古びないのはそのためだ。同時代の作家たちの作は次々に耐用年数を終えて消えていったが、彼は古典となった。彼自身そうなることをうすうす知っていたのかも知れない。自分は古典を書くのだという運命を自覚しないかぎり、あんなに毅然たる生きかたはできない。すなわち、中島敦は後の世に生まれるあなたのために、あの端正な作品群を書いた。

10月12日刊行開始

第一回発売 第一巻

4480-73811-8 7800円

第二回発売

12月20日

第二巻

4480-73812-6 予価7800円

\*以降、隔月刊 定価各巻不同

#### 本全集の特色

- ・二十五年ぶりに原資料にすべて当たり直した新編集による決定版
- ・公表された作品のみならず、原稿類、ノート、手帳、日記、断片、書簡にいたるまですべて収録
- ・新発見のエッセイ二篇と未翻刻のノート・断片等も新たに収録
- ・生前未刊行のものについては、原文にある抹消、挿入、併記を本文中に表示
- ・主要なものについて語注を巻末に掲示
- ・難読の漢字に編者によるルビを付す

#### 造本・体裁

A5変型判・上製・貼函入・平均六五〇頁 月報八頁 装幀中島かほる



ご注文・お問い合わせは下記の小社サービスセンターへ  
〒331-8507 さいたま市榑引町 2-604 TEL 048(651)0053 FAX 048(666)4648

中島敦全集【全3巻 別巻】を セット申し込みます お申込書店

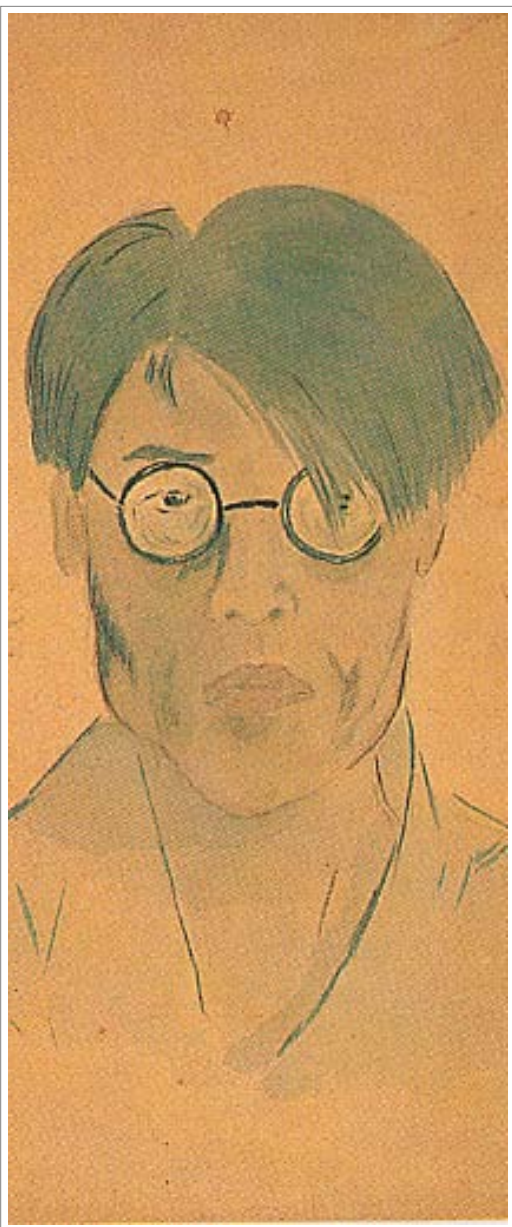
お名前 \_\_\_\_\_

ご住所 \_\_\_\_\_

お電話番号 \_\_\_\_\_

## 不思議な光芒を放つ珠玉の名篇を残した中島敦

あらゆる方位に向かつて開かれたその可能性のすべてを明らかにする！



筑摩書房

編集委員

高橋英夫

勝又浩

鷺只雄

川村湊

# 中島敦全集

【全3巻・別巻1】

## 無限の余韻

白川静

名篇「山月記」や「李陵」の作者中島敦について、もっと深く知りたいと思ってその全集を求めたのは、私が「説文新義」を稿了するところであった。敦の伯父の第三兄中島竦の「書契淵源」は、五帙十二冊、全文漢文で書かれ、著名な中国書肆文求堂から出版された。議論雋鋭、当時わが国最高の文字学書で、祖父撫山に発するその家学の、深無なるを思わせた。次兄斗南の才藻と狂狷については、「斗南先生」の一篇に活写されている。

敦の東大国文学科の卒業論文には、自然主義文学以後の耽美派の抬頭を論じ、その文学に対する痛烈な批判があり、敦の知性派的な特質が早くも示されている。生前未発表の原稿には翻訳や、ヨーロッパの文学・思想に関する論考も多く、それらは敦が稀有の利器であったことを伺わせる。大戦の混乱期に、みことな光芒をみせた敦の文学は、今も無限の余韻を残している。

## ことば

### 二十一世紀への問い

陳舜臣

中島敦は日本が戦争による文学空白の時代を呈したころ、突如、ふしぎな光を放ち、そして去った星である。

『李陵』は彼の遺稿であるが、じつは彼は耶律楚材を主人公に小説を書く計画があり、そのことを友人に語っている。漢学者の家系である中島家には、楚材の文集である『湛然居士文集』十四巻があり、中島敦は途中まで朱を入れていた。楚材は遼の皇族の契丹人であり、彼の父は遼を亡ぼした金に仕え、楚材はその金を亡ぼしたモンゴルに仕えた。しかも彼は母国語である契丹語を話せない契丹人であった。このように生まれながら自分の運命と格闘した男をとりあげようとした中島敦の心中にながらあったのが、私は彼の作品に接するたびに考える。中島敦は戦中に病没したが、彼が問いかけたかったのは、二十一世紀の今日的な問題であると思う。

# 全巻内容



# 二十三年間の生涯

明治四十二年(九〇九)五月五日、東京市四谷区で、父田人、母子三の長男として生れる。父は漢学者・中島撫山の第七子で、漢文科教師として中学校に勤務。明治四十三年(九一〇)一歳

二月、父母離婚。四月、父、奈良へ単身転勤。明治四十四年(九一一)二歳

六月、祖父撫山中島慶太郎死去。八月、埼玉県久喜町の祖母たちのもとに引きとられる。大正四年(九一五)六歳

三月、前年二月紺家カツと再婚していた父の奈良県郡山町の家に引きとられる。大正五年(九一六)七歳

四月、奈良県郡山男子尋常小学校に入学。大正七年(九一八)九歳

七月、静岡県浜松西尋常小学校に転入学。大正九年(九二〇)十一歳

九月、京城市龍山効率尋常小学校に転入学。大正十二年(九二二)十三歳

四月、朝鮮京城府効率京城中学校に入学。大正十二年(九三三)十四歳

三月、妹澄子生れる。同月、継母カツ死去。父、翌年四月、飯尾コウと再々婚。

大正十四年(九二五)十六歳

十月、父の大連第二中学校転勤により、伯母志津のもとに移り住む。

大正十五年(九二六)十七歳

一月、三つ子の弟妹、敬、敏、睦子生れる。

四月、第一高等学校文科甲類に入学、寄宿舎に入る。八月、弟敬死去。十月、弟敏死去。

昭和二年(九一七)十八歳

四月、氷上英廣を知る。十一月、「校友会雑誌」に「下田の女」を発表。

昭和三年(九一八)十九歳

四月、寮を出、渋谷の弁護士宅に寄寓。このころから喘息の発作があったといわれる。

昭和四年(九一九)二十歳

四月、文芸部委員となり、「校友会雑誌」の編集に加わる。夏、芝のアパートに移る。アキ、釘本久春、氷上英廣らと同人雑誌「しむぼしおん」をおこなすが、一度も執筆しなかった。

昭和五年(九二〇)二十一歳

三月、橋本タカと初めて会う。十月、父が大連から帰国、市外駒沢町に父母と共に住む。

昭和七年(九三二)二十三歳

春、橋本タカ(二十三歳)との結婚の話固まる。八月、南満州、中国北部を旅行。秋、朝日新聞社の入社試験を受け、身体検査で不合格。

昭和八年(九三三)二十四歳

三月、東京帝国大学文学部国文学科を卒業。卒業論文は、「耽美派の研究」。四月、同大学院に入学。同月、横浜高等女学校教諭となり、単身赴任し、横浜市中区のアパートに住む。

四月、妻の郷里愛知県碧海郡で長男桓生れる。九月、「斗南先生」脱稿。

昭和九年(九三四)二十五歳

二月頃、「虎狩」を脱稿。「中央公論」の懸賞募集で選外佳作となる。三月、大学院中退。

昭和十年(九三五年)二十六歳

四月、京城中学の後輩、三好四郎を知る。六月、横浜に借家して、初めて妻子と共に住む。

昭和十一年(九三六)二十七歳

四月、継母コウ死去。六月、初めて深田久彌を訪ねる。八月、中国旅行。この年、「狼疾記」「かめれおん日記」の第一稿ができる。

昭和十二年(九三七)二十八歳

一月、長女正子生れるが、三日後死去。十一月から十二月にかけて多くの「歌稿」成る。

昭和十四年(九三九)三十歳

一月、「悟浄歎異」の原形を書き上げる。この年、喘息の発作が激しくなる。

昭和十五年(九四〇)三十一歳

一月、次男格生れる。六月、伯父中島謙死去。昭和十六年(九四一)三十二歳

二月、転地療養と文学への専念を真剣に考え始める。三月、女学校を休職。六月、南洋庁に就職。書き上げた原稿「ツシタラの死」などを深田久彌に託す。七月、植民地用の教科書を作るための準備、調査に赴任。同月下旬からアミーバ赤痢による高熱と下痢に苦しむ。

八月下旬、デング熱にかかる。土方久功を知る。九月から、近隣諸島の公学校を巡回訪問出張。十一月からの第二回長期出張の途次、サイパン島で日米開戦の報を聞く。十二月、喘息発作を繰り返す。三十一日、「心臓性喘息」を理由に「内地勤務」希望を提出。

昭和十七年(九四二)三十三歳

一月、パオ本島一周の出張。「山日記」「文字禍」を、「古譚」と題して「文学界」二月号に発表。二月、ベリリユウ島、アンガウル島へ出張。三月、東京出張の許可が出て出立。

世田谷の父の家に帰った。気候激変のため激しい喘息と気管支カタルを発して治療。「光と風と夢」を、「文学界」五月号に発表、芥川賞候補となる。六月、「弟子」「悟浄出世」を完成し、杉森久美に渡す。「盈虚」「牛人」を、「古俗」と題して、「政界往来」七月号に発表。七月、「光と風と夢」筑摩書房刊。九月、南洋庁を退職。十月頃から喘息発作が激しくなる。十一月、「南島譚 今日の問題社刊」。

この頃、心臓の衰弱が激しく、入院。「名人伝」を、「文庫」十二月号に発表。十二月四日午前六時死去、多磨霊園に葬られる。翌年、エッセイ「章魚木の下で」が、「新創作」一月号に、「弟子」が、「中央公論」二月号に、「李陵」が、「文学界」七月号に掲載された。

## 第一巻

- 小説 光と風と夢
- 古譚 狐憑
- 山月記 木乃伊
- 文字禍 文字禍
- 斗南先生 虎狩
- 光と風と夢 南島譚
- 南島譚 幸福
- 夫婦 鶏
- 環礁 ミクロネシア巡馬記抄
- 寂しい島 夾竹桃の家の女
- ナボレオン
- 真昼 マリヤン
- 風物抄
- 悟浄出世 悟浄歎異
- 沙門悟浄の手記
- 古俗 盈虚
- 牛人 過去帳
- かめれおん日記
- 狼疾記
- 没後発表作品
- 名人伝
- 弟子
- 李陵

## 第二巻

- 下田の女
- ある生活
- 喧嘩
- 藤・竹・老人
- 巡查の居る風景
- D市七月叙景(一)
- 未定稿
- 北方行
- ブルルの傍で
- 無題
- 妖氛録
- 短歌・歌稿・その他
- 羌笛
- 和歌でない歌
- 河馬
- M. Soelany
- 霧ウルク・ぎんがみ
- Ms. V. Ir tuoses (M. V. Ir tuos)
- 朱塔
- 小笠原紀行
- 漢詩
- 訳詩
- 雑纂
- 文芸部部史
- 「校友会雑誌」第三百二十号 編輯後記より
- 「学苑」第五号 編輯室雑誌
- 「のスポーツが好きか」
- 「学苑」第七号 後記
- 「学苑」第八号 編輯後記
- 「ゆかりの梅」三十八号 編輯後記
- お国自慢
- 「学苑」第十号 後記
- 「ゆかりの梅」四十号 編輯後記
- 翻訳・レポート
- バスカル(オルダス・ムクスレイ)
- スワガの虫(オルダス・ムクスレイ)
- クラックストン家の人々(オルダス・ムクスレイ)
- 罪・苦痛・希望・及び真実の道について
- 新古今集と藤原良経
- 現代の芸術に就いて
- 草稿ほか
- 光と風と夢(文学界)掲載短縮部分
- 悟浄歎異(草稿)
- 寂しい島(草稿)
- 或る午後(夾竹桃の家の女)草稿
- ナボレオン(草稿)
- 真昼(草稿)
- マリヤン(草稿)
- 風物抄(草稿)
- 名人伝(草稿)
- 子路(弟子)草稿
- 章魚木の下で(草稿)

## 第三巻

- 卒業論文
- 耽美派の研究
- ノート・断片
- 創作ノート
- ノート第一 第十二
- 断片一 四十九
- 手帳・日記
- 手帳
- 昭和八年
- 昭和十一年
- 昭和十二年
- 昭和十三年
- 昭和十四年
- 昭和十五年
- 昭和十六年
- 年代未詳
- 御台所当座帳
- 日記
- 南洋の日記(昭和十六年九月十日)
- 昭和十七年二月二十二日)
- 書簡
- 大正十五年
- 昭和二三年頃
- 昭和六年
- 昭和七年
- 昭和八年
- 昭和九年
- 昭和十年
- 昭和十一年
- 昭和十二年
- 昭和十三年
- 昭和十四年
- 昭和十五年
- 昭和十六年
- 昭和十七年
- 年譜
- 同時代評・評論・研究・回想
- 来簡
- 撫山関係

## 別巻

- 光と風と夢(文学界)掲載短縮部分
- 悟浄歎異(草稿)
- 寂しい島(草稿)
- 或る午後(夾竹桃の家の女)草稿
- ナボレオン(草稿)
- 真昼(草稿)
- マリヤン(草稿)
- 風物抄(草稿)
- 名人伝(草稿)
- 子路(弟子)草稿
- 章魚木の下で(草稿)

# 中島敦全集

刊行にあたって

高橋英夫

明治このかた、散文韻文を問わず、文章でもって人の心を揺るがした傑物・奇士は少なくなかったが、中島敦は格調高邁、声を出して朗読するのにふさわしい作者たちの上位を常に占めてきた。とはいえ、それは声高に遠近の人の耳を襲うようなものではなく、ひとり静かに低唱して、文はわが内に在り、と秘めるべき文学だった。

今の世、伝達言語は柔媚にも平俗な規格に押しこめられているし、表現言語もしばしば放恣無残に墮ちかけている。その中で漢文脈という格を単なる文体としてではなく、苛烈な生死に帰した人間の志操の形として刻んだのが中島敦である。その文学はわれわれの眼と耳に、また心に燦々と映り、凜々と鳴り、耿々と届く。僅か三十余年を生きたマイナー・ポエツトは、マイナー・ポエツトのみの特権において、いかなる世代にも畏敬をもって読み継がれてゆくことだろう。